

主 旨 説 明

こゝ数年来御存知のように世界の食糧問題、食糧危機の問題は非常ににぎやかに議論されるようになってきました。しかし、具体的にどのように解決していくかと言う点につきましては試行錯誤の段階であり、明確な方向性が示された訳ではありません。基本的には人口増加の歯止めが無い限り、この人口を養うための食糧を死にものぐるいで増産する努力を続けなければならないこととなります。その食糧増産を推進する方策は大きく分けて3つの柱より成り立ちます。1つは耕地面積を増やすこと、2つは栽培技術を改善すること、3つは現在栽培している農作物の素質を良くすること、いわば品種改良、体質改善です。

最初の耕地面積を増やすことは、現在の人口増加率から単純計算して、毎年800万haずつ新たに開拓しなければならず、この考えを継続して実施していくことは不可能です。2番目の農耕技術の進歩は現実に種々の作目、世界の各地で実施され、貢献しています。しかし、緑の革命の例でもわかりますように、1つの優れた技術と言うものは、必ずしも画一的に世界中で優秀ではあり得ません。また農民の主体性を無視して押し付けることは、農業自体の自殺の原因ともなります。

3番目の農作物の改良はどうでしょうか。世界の農耕に利用されている土地は大変多様性に富んでいまして、他の生物の生活環境に較べて非常に大きいものです。従ってそのような多様な環境に適する作目・品種は当然多様性に富んでいますので、それら全体を対象として品種を改良するのは大事業です。また例え良い品種が出来ても、長続きしない場合もありますので、常に品種改良を継続していかなければなりません。その品種改良をするための材料は、一応手元にあります遺伝子を使う訳ですから、栽培の歴史の非常に長い作物では品種改良の道は既にdeadlockであるとする見方すら御在居ます。

そういう意味で、現在では先ずは各人、または分譲し合って手持ちの素材を使いながら、並行して、手元に無いものを捜して廻ろうというのが探索です。ところが具体的に探索されたもの、その報告書のみてみますと、どうも片寄った探索が為されたと言う印象は否めません。なぜかと言えば、現在我々の知識の中、経験の中にあります遺伝子源といいますと、本当に自然状態の遺伝子源を網羅しているとは言えず、ちょっと計算してみましてもほんの数パーセントしか当たっていないのです。従いましてまだ手を付けず、あるいはその存在すら知られていないであろう遺伝子源の方が遙かに多いと言えるでしょう。

ところが、その方面の研究会、討論会なるものはあまり行われていません。南方地域から各種の植物種または品種を持って来る、すなわち導入、またそれを日本にどう馴染らし、どう利用するか、すなわち順化及び品種改良については、非常に多くの研究会、シンポジウムが行われていま

す。その元と成ります探索，すなわち集めること，その基礎となる分布についての知識などに関する研究会の現状は寒々としたものがあるのが実状で，それが先刻申しました材料にひとつ寂しいところがある原因ともなっています。

このような background を考えまして，基本的な探索の考え方と実際，その基礎となる分布の実情とその知識の使い方などについて，今回は，マメ，果樹，イネの3つの作物を取り上げて考えてみます。当初計画していましたがもう1つの作目，イモは時間の関係で割愛致しました。他の作物については，今回のシンポジウムの実績を踏まえ，いずれ話題になることを期待します。

先刻，この探索関係のシンポジウムは非常に少いと申しましたが，実は偶然にも農水省関係で探索のシンポジウムが丁度今日この時刻に東京で行われています。偶然の一致に驚くと同時に，このテーマが重要であることがようやく認識されてきたことを痛切に感じます。

南海研の初代所長でありました中尾佐助先生は，この種の遺伝子源のことを“文化財としての遺伝子源”と言う表現をなさいました。今日はそう言う面も含めたシンポジウムにしたいと思います。

1985. 2. 25 (月)

シンポジウム

「南方地域有用農作物遺伝子源の分布と探索」

企画責任者：鹿児島大学農学部 片山忠夫